「苑」この人に会いたい
作　家
立松和平さん（60歳）

立松和平

「万年筆ひとつあれば
どこでも書く。
いちばん時代遅れの
作家になりたいですね」

純文学作家としては異例なほど多彩な分野の著書を生み出し、その数およそ290冊。山谷生活、公務員といった人生経験を経て、行動派の作家として輝き続ける立松和平に迫った。

大学卒業後は自由の身に

1947年に栃木県宇都宮市で生まれ、1966年に早稲田大学経済学部に入学。在学中に執筆した処女作『途方にくれて』が雑誌『早稲田文学』に掲載された。大手出版社の内定をもらっていたが就職はせず、しばらく過ごした地は山谷（東京都台東区の旧町名）。

「どうしても小説を書きたいなと思って、自由になったんですね。あの頃は高度成長期でしたから、働こうと思ったらいくらでも仕事があった。山谷に行ったのは、生活費が簡単に稼げるというのが最大の理由ですね。当時、働きたい時に泪橋交差点というところに行って立ちんぼをしていると、手配者が来て仕事を斡旋してくれるんですよ。若かったし、体もがっちりしていたので、仕事は困らなかったですね。自分は飛びぬけて若かったので、親分が来て『子分になれ』ってアパートに連れていかれて、『真面目にやればちゃんとなるんだからしっかりやれ』なんて言われて。毎朝親分と一緒に仕事に行くようになったんですね。

面白かったですよ、それなりに。100円で酔う方法教えてやるって言われたり。20円で小さなグラス1杯の焼酎が自動販売機で買えるんですよ。20円の焼き鳥2本と焼酎3杯飲むんですけど、焼き鳥の横にある一味唐辛子を焼酎に入れて指でかき混ぜて飲んだ後に走れって言われてね。すごく悪酔いしますよ（笑）。出張っていって飯場で一ヶ月ぐらい働いて帰って来た人が「兄ちゃん、おれ出張帰りだからおごってやるよ」っておごってくれたり。外から見ると恐ろしいような世界ですけど、中に入ってみるといたわりに満ちていてね。流れものの場所だけれども、けっこう居心地はよかったですね」

早稲田大学の入学式にて。
隣はお父様

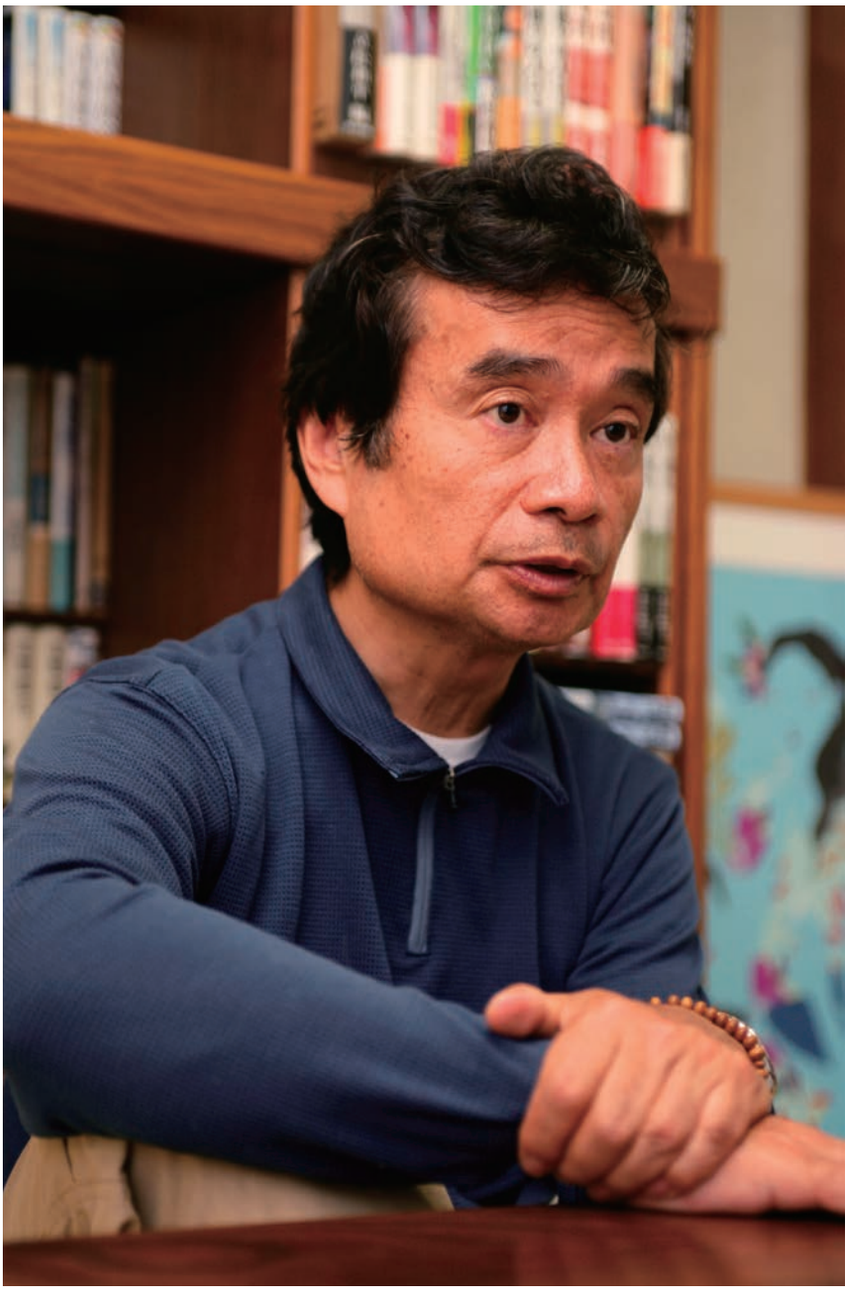
身重の妻を残して単身インドへ

大学を卒業した年に結婚。早稲田文学編集部に勤務していた、現在の奥さんである。その出会いや結婚までの経緯は『蜜月』に描かれている。

「物を書いて生きていきたいなと思ったのは、就職をするかしないか悩んだ頃じゃないですか。結婚したのは山谷にいた頃です。忘れもしないけど、年収は19万でした。山谷は現金で日当3000円か4000円ぐらいもらえたから、10日も働けば一ヶ月暮らせたんです。世間的にはひどい暮らしですけど、それが出発点だったかもしれない。まあ自分の人生だから好きなようにやっていこうと思ってました。

結婚してからですけど、インドにどう

大学3年の時。芝居の台本を手がけていた



しても行きたかったんです。彼女が妊娠して子供を産むことになって、周りに相談したら「おまえが働け」ってみんなが言う。そりゃ当たり前ですよね。僕もそう思うけど、働くのは最後、と思って、一人でインドに行ったんです。自分がどこに向かっているかわからなくて、子供ができるから逃げたみたいな感じでしたね。旅費は、かみさんが貯めたお産の費用みたいなものをくれたんですよ。貸してくれたのかな？わからないけど。でも三ヶ月半いて、5万円ぐらいしか使わなかった。100円ぐらいの汚い宿に泊まって、貧乏人の旅するルートを歩きました。一人旅というのは本当に暇で、苦しいぐらい暇なんです。本当に迷いに迷って、苦しい旅でしたよね。金もないし、決して快楽の旅ではなかった。女房は実家で子供を産む準備をして、僕は放浪の旅をしてたわけです。その時に得たものは大きいですね。あまり荷物は持っていかなかったけど、本を一冊、文庫本で『ブッダのことば』を持って行ったんです。難しそうだし、ちょっと面白いかなと思って。それもいろんな意味で深い影響を受けましたね。心に種を蒔いたんです」

山谷から一転、国家公務員生活

1973年、経済的な理由から帰郷し、宇都宮市役所に就職。働きながら、栃木を題材にした小説を書き続けた。

「子供が産まれて、なんかもう東京（の生活）も終わりだなーと思ってね。当時、同世代で親しくつきあってた中上健次が華々しくデビューした頃でした。『田舎に

『ブッダのことば』（スッタニパータ著、中村元訳）
インドで読んで感銘を受け、対談で会った中村元さんのサインが入っている宝物の一冊

35歳の時。ボクシングは35〜43歳まで続けた。好きだった

帰ったらそれっきりで駄目になるぞ』って彼が言った言葉はよく覚えてますね。中上が先頭を走って、高橋三千綱とかみんな田舎から出てきた人たちが奮闘していた時代ですよ。

市役所の試験は法律がほとんどなので一夜漬けで問題集解いて、冗談みたく受けたら上級試験に受かっちゃったんですね。子連れのルーキーですよ。インドから帰って市役所に行ったから、顔は髭もじゃで髪も長いし、いわゆるヒッピースタイルですね。市役所に就職のための書類を取りに行ったら、職員に高校の同級生がいて『お前、なんだ』って言われて。『明日から市役所に勤める』って言ったら笑われてね（笑）。彼とは今でも親友ですよ。

辞令が出たのは、宇都宮市教育委員会総務課経理係。経済学科卒だから経理ができると思ったんじゃない？（笑）。何でもよかったし、辞令だからしょうがないですよね。僕は中学校の予算を担当して、いきなり莫大な予算を執行するんです。算盤の世界だから、できなくってね。周りはすごい速さで計算しているのに僕は何度やっても合わないし、課に一台だけあった電卓はいつも僕の机にありました。まぁ、大きなヘマをしたわけでもないし普通に勤めて、その間も小説をぽちぽち書いていました。書くことを忘れたことはなかったですね」

市役所を辞めて作家一本に転身

宇都宮での公務員生活は5年9ヶ月。終わりの頃には単行本が出始め、3冊ほどが書店に並ぶようになっていた。市役所を辞めるきっかけになったのは、職務専念の義務という公務員の縛りと奥さんの言葉だったという。

「最後の方は本が重なってでていたから、ちょうどいい時期かなと思って辞めました。食えるかなって思いはありましたけどね。かみさんに『もう市役所で働くのはダメだ』って言ったんですよ。そしたら『そんなの辞めればいいじゃない』って（笑）。30だけど昔に戻ればいいんだって思いましたね。

家は安い建て売りの団地があったんです。おやじが『30近くなって家も持たないでどうするんだ』って頭金を貸してくれてね。でも僕は、家を持つのが嫌だった。そこにいなくちゃならなくなるし、放浪者なんだから、大げさだけど断腸の思いで家を持ちました（笑）。その家はまだ置いてあるんです。そこで『遠雷』などたくさん作品を書いて、その土地をベースにしたものもあるし、子供たちが育った家族の原点、ふるさとですからね。

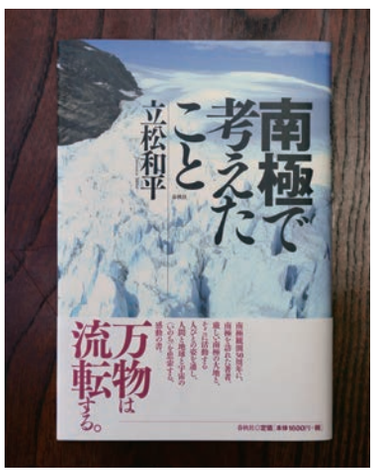
作家として食えるようになったのは『遠雷』以降だから、30過ぎてからですね。国家公務員になっても山谷に行っても、人のやることはたいして変わらないですよ。どっちが偉いとか、お金を稼いだ人が偉いとは思わない。文学をやりたいと思って選んだ人生っていうんでしょうかね。卑下することもないし、おごることもないって感じかな」

万年筆で生み出される作品の数々

立松さんにとって欠かせない仕事の相棒は、万年筆。大学時代に執筆した最初の作品『途方にくれて』の時は鉛筆だったが、今でもその当時に使った原稿用紙を愛用しているとか。

「どこでも書くので、万年筆。パソコンはあまり得意じゃないというのが第一の理由だけど、そうなったのは万年筆ひとつあればどこでも書けるっていう職人みたいに生きたいからなんですね。万年筆は時代遅れですよ。でもそれでいいと思うし、いちばん時代遅れの作家になりたいんだけど、世の中にはまだまだ先を行く人がいるからね（笑）。まあ普通にやっているうちに、そのうち一番時代遅れになるでしょう。

万年筆は高いものなら手に合うかというとそうじゃないし、難しい。今使っているのはプラチナ万年筆で2万円ぐらいかな。一枚ぐらいなら多少合わないものでもいいけど、いっぱい書くから手にぴたっと合うものでないと。今使えるのは2本だけですね。原稿はファックスで送っているけど、やっぱりパソコンに慣れた世代の若い編集者は、手書きが読みにくいみたいですね。だんだんと住む場所が狭まってくるんじゃないですか。いまさら作品を量産しようとは思わないし、手が痛くなって書けなくなったらやめればいいかなって。まぁ今のやり方でいいかなと思ってますけどね」



『南極で考えたこと』（春秋社）
厳しい南極の大地とそこで活躍する人々を通して、人間と自然、地球と宇宙のありようを語る感動のエッセイ

自然環境保護にも積極的に参加

『百霊峰巡礼』の取材で全国の山を登ったり、毎年のように法隆寺で一週間参堂したり、昨年は南極観測50周年のイベントに招かれて南極を訪れるなど、国内外を問わず各地を旅する行動派の立松さん。近年は自然環境保護にも積極的に取り組み、「足尾に緑を育てる会」のメンバーとして植林に力を注いでいる。

「僕ひとりでやってるわけじゃないですけどね。『足尾に緑を育てる会』は13年前に立ち上げて、最初からのメンバーなんです。いつも6月の最終土日が植林する日でね。最初に呼びかけて来てくれたのは150人ぐらいでしたが、今は毎年1500人以上のボランティアが来てくれるようになりました。大掛かりなこと

になったけど、おかげで確実に緑になっていますね。去年は紅葉も」

大きな自然環境保護活動は二つされており、「足尾に緑を育てる会」から派生した「古事の森」という活動もある。

「文化財を守るために全国10ヶ所に国有林の森を作る活動なんですね。例えば法隆寺は、聖徳太子の時代の１００年後ぐらいに再建したものですが、聖徳太子の時代にはもっとたくさん森林があったのがよくわかるんです。法隆寺はどんな柱も四つ割りなんですね。そうするとひび割れがしないし、均等に乾く。小川三夫さんという西岡常一棟梁のお弟子さんがよく言っているけど、木を生成りに割ってあるから法隆寺の柱はすごく太いでしょ。実際はその4倍あるわけだから、ものすごい木ですよね。今はそんな大きな材料はおろか、檜の補修材さえないんですね。だからせめて直径１m以上の木が取れる『古事の森』を全国に作ろうということで、8ヶ所まできました。とりあえず、最初の計画の10ヶ所を国有林だけで実現したいですね」

今後は〝やりたいことを確実に〟

現在は多数の連載を抱えながら、仏教総合雑誌「大法輪」で良寛について執筆中。

「『道元禅師』が終わって、さみしくてねぇ。一生懸命勉強しながら書いたけど、書き終わって道元禅師を理解したなんてとても思えない（笑）。道元思想を人間の中に生き方として取ったのは良寛さんだなと思って書き始めて、もう３００枚ぐらいいったかな。こういうものは反響も大きいし、楽しいですね。『大法輪』のバックナンバーが全部欲しいって言われたり、見ず知らずの人から良寛さんの資料が届いたりするんですよ。応援してくれてるんだなっていう実感がありますね」

昨年南極を訪れて貴重な資料が手に入り、現在は南極探検隊の白瀬 矗さんを題材にした小説を書き下ろすなど執筆中の作品がいくつもあるが、今後書いてみたいものについてきいてみた。

「いっぱいありますけど、自分の父母を軸にして父母の精神と満州帝国を描いた小説は書きたいなと思ってます。去年、文化交流使として一ヶ月間中国に行って、旧満州、長春、瀋陽、大連と各地を回って、向こうの作家ともすごく親しくなったんですね。もう取材はしてあるんです。ただ、60になりましたからいつまで書けるかわからないし、これから戦線拡大はもうしない。父と母を題材にした小説は僕にしかできないことだし、今後はやりたいことを確実にやっていきたいですね。だんだん小説が社会の片隅にきたなという感じはあるけど、読者は少なくてもいいから、いい作品を残していきたいなと思います」